



TITLE:

續正貨蓄積論

AUTHOR(S):

小川, 郷太郎

CITATION:

小川, 郷太郎. 續正貨蓄積論. 經濟論叢 1916, 3(1): 61-74

ISSUE DATE:

1916-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127050>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

經濟論叢

第一號

第三卷

論說

資本ノ概念

資本利子税設定ノ氣運

支那近代ノ戸口ニ就テ(一)

續正貨蓄積論

戸田博士ノ不換紙幣論ヲ讀ミテ

保險本質論(二)

雜錄

經濟雜話第四

聯合諸國輸出入禁制ノ我國ニ及ボス影響ニ就テ

對露輸出品代金ノ支拂決濟ニ就キテ

經濟戰爭ト我貿易上ノ利害

現前ノ大戰爭ニ就テノ感想

乳兒死亡率ト出生率トノ關係

らザレ「み」る學說ノ研究(二)

本多利明ノ經濟說ニ關シ本庄學士ノ教ヲ乞フ

米國ニ於ケル移民教育機關

補習教育義務ノ可否

法學博士 河上 肇

法學博士 神戶 正雄

文學博士 內藤虎次郎

法學博士 小川郷太郎

法學博士 福田 德三

法學士 小島昌太郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

法學士 河田 嗣郎

文學士 米田庄太郎

文學士 高田 保馬

商學士 大塚金之助

法學博士 福田 德三

山本美越乃

法學士 財部 靜治

(載 轉 禁)

續正貨蓄積論

小川 郷太郎

余ハ本誌三月號ニ於テ在外正貨處分ニ就テト題シ、在外正貨ノ濫ニ處分スベキモノデナク、將來萬一ノ場合ニ備フルガ爲メニ蓄積シテ置カネバナラメト云フコトヲ論ジテ置イタ、然ルニ、此拙キ論文ハ、大方識者ノ目ニ觸レタト見エ、或ハ雜誌ニ於テ或ハ私ノ通信ニ於テ、卑見ヲ駁撃セララルルモノガ出テ來タ、就中河津博士ハ國家學會雜誌四月號再ヒ在外正貨ノ處分問題ニ就テト云フ論文ニ於テ、三宅嘉十郎氏ハ、三田學會雜誌四月號小川博士ノ正貨蓄積論ヲ讀ムト云フ論文ニ於テ、種々ノ方面カラ余ノ說ヲ批評セラレテ居ル、余ガ蒙テ啓カレタコト少クナイ、余ハ之ニ對シテ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表シタイ、余ハ前ノ論文ニ於テ在外正貨處分ニ關スル色々ノ問題ニ觸レントシタガ爲メニ、一ツ一ツノ問題ニ就テハ簡ニ過キテ、趣意ノ徹底セザル所モアリ、又在外正貨處分論者ヲ駁撃スルニ急ニシテ、語勢強キニ過キタ所モアリ、或ハ讀者ノ誤解ヲ招キタカモ知レヌ、ソコテ余ハ茲ニ河津博士三宅氏ノ御批評ニ答ヘ、旁々前論ノ足ラザリシ所ヲ補ハント思フ、

前ノ論文ノ體裁ニ從ヒ余ノ自說タル正貨蓄積論ト正貨處分論ノ駁撃トノ二段ニ分テ論シタイニ二者ハ固ヨリ相關聯シテ居ルガ、前ニ此ク分テテ論シタモノカラ、此別チニ從テ駁論モ來テ居ルヤウニ見受ケル、現ニ三宅氏ノ如キハ、余ノ正貨蓄積論ニハ別ニ批評ヲ下サレテ居ナイ、仍テ余ハ批評ニ答フルニモ同シク二段ニ分テ便宜ト考ヘ、此論文デハ、余ノ正貨蓄積論ヲ辯護シ、次號ノ論文ニ於テ、更ニ在外正貨處分論ヲ駁シテ見ヤウト思フ、

余ハ前論文ニ於テ、正貨ハ信用制度ノ基礎ヲ維持スル上カラ之ヲ蓄積セバナラヌコト、戰後ノ金融界デハ正貨爭奪戰ガ行ハルルヤウデアルカラ、正貨蓄積ノ必要ハ更ニ急切トナツタコトヲ

力説シタ積リデアルガ、十分ニ河津博士ノ賛成ヲ得ルコトガ出來ナカツタ様デアル、ソコデ、河津博士ノ駁論ヲ追テ之ニ答ヘツツ自説ヲ主張シテ見ヤウ

河津博士ハ先ヅ在外正貨制ノ價值ヲ論ジ正貨蓄積ノ程度ニ及バレテ居ルガ其論ノ歸スル所ハ左ノ如クデアル

今日ト雖トモ尙相當ノ在外正貨制ヲ維持スルノ必要ナルハ信ジテ疑ハザルナリ、況ンヤ中央銀行ガ兌換制度ヲ維持スルガ爲メニ相當ノ正貨ヲ蓄積シテ正貨準備トナスハ法律ノ命スル所ニシテ經濟上甚ダ必要ノコトニ屬ス、然レトモ小川博士ノ主張セラるル如ク、正貨準備特ニ在外正貨ヲ多々益々増加セザル可ラサルモノナリヤ、研究セザル可ラザルナリ……余輩モ戰爭終局ヲ告グルノ日ハ激烈ナル經濟戰爭生ズベキコトヲ信ズ、然レトモ之ニ處スルノ策トシテ多々益々正貨ヲ蓄積スルヲ以テ最モ適當ナルモノトハ信スル能ハズ*

是デ觀ルト博士ハ相當ニ在外正貨ヲ蓄積スルニハ異議ナキモ只多々益々蓄積スルト云フコトニ反對セラルルモノラシイ、然ラハ、博士ノ所謂相當ト云フノハ如何ナル點デアルカ、

博士ハ余ガ説ヲ以テ正貨ヲ多々益々蓄積スルモノナリトシテ斥テ居ラレルガ多々益々蓄積スルガ非デアルナラバ論理ノ順序トシテ正貨蓄積ハ如何ナル點ヲ以テ相當トスルカヲ示サレバナラヌ、然ルニ博士ハ此點ニ於テ何等垂教セラルル所ガナイ

邦人ノ正貨準備ニ對スル心理作用ヲ見ルニ、正貨ガ例ヘバ一億圓ナラ一億圓アルト安心シ、ソレ以下ニナルト心配シ初メル様デアル、博士モ亦或ハサウ云フ考デハアルマイカ、ソレナラバ、ソレトシテ日本國民ノ安心スル正貨ノ一定額ナルモノニ就テ考フルニ歐洲戰後ハ從前ヨリモ巨額ノモノデナクテハナルマイト思ハレル、蓋シ戰時ヨリ戰後ニカケテ我國ノ經濟ハ次第ニ發展シ

テ行キ戰前ヨリモ多クノ生産ガ行ハレ多クノ貿易ガ行ハルルニ至ルカラ兌換券信用ノ基礎デア
正貨モ亦多クナクテハ安心ガ出來ナイ様ニナルカラデアアル、故ニ戰後ハ無事平穩デア
正貨ヲ多ク持テ居ルコトガ必要デアラウ、

處ガ戰後ノ經濟界ハサウ無事平穩デアアルマイ、

今日歐洲戰爭ノ行ハレテ居ル時ニ於テモ、各交戰國ハ正貨吸收ニ熱中シテ居ル、戰後ニ於テハ
其趨勢ハ尙甚シクナツテ行クラシイ、余ハソレヲ正貨爭奪戰ト名ケテ置イタ、我國ハ今ヨリ、此
正貨爭奪戰ニ備フル所ナクテハナラヌ、

博士ハ余ガ此論ニ對シテハ何等駁撃ヲ加ヘラレテ居ナイ、併シ其文脈ヲ辿リテ見ルニ、正貨爭
奪戰ニ備フルト云フ根本說ニハ反對セラレテ居ナイラシイ、

若シ戰後ノ正貨爭奪戰ニ備フノ必要ヲ認メラレルナラバ、正貨準備トシテ蓄ヘ置クベキ相當ナ
ル額ハ尙大ニ増サネバナルマイ、故ニ博士ガ若シ相當ナリトスル額ヲ示サレタナラバ、余ガ結論
ト餘リ懸絶シテ居ナイカモ知レヌ、

二

正貨爭奪戰ニ備フル必要ニ就テハ博士ハ此ノ如ク臆見ニ反對セラレテ居ナイ様デア
法ニ至テ反對セラレルノカト思フ、余ハ正貨爭奪戰ニ備フルニハ正貨ヲ握テ居ルノヲ必要ト思フ
ノデア
ルガ、博士ハ全ク反對デ之ヲ處分セヨト云ハルルノデア
アル、今、博士ガ正貨爭奪戰ニ備フ
ル方法トシテ擧ゲラレル所ヲ見ルニニアリ、其第一策トシテ論セラルル所ハ次ノ如クデア
ル

我國モ可成輸入ヲ少クシ輸出ヲ多クスルノ策ヲ講セザルベカラズ、其目的ヲ達スルニハ租税ノ負擔ノ如キハ成ルベク輕減シテ經濟力ノ涵養ヲ計ラザルベカラズ、外債ノ負擔ヲ輕減スルハ租税負擔ヲ輕クスルニ於テ稅制整理ト相符テ必要ナリトナス也、加フルニ兌換券ノ増加ヲ誘致スル虞アル正貨準備制ノ膨脹ノ如キハ輸出増進輸入減退ノ爲ニ之ヲ避ケザルベカラズトナス也、*可成輸入ヲ少クシ輸出ヲ多クスルコトハ正貨爭奪戰ヲ爲ス一方法デアルコト疑ナイ、余モ亦前論文ニ戰後各國ガ此方策ヲ採ルダラウト暗示シテ置イタ、所デ此方策ヲ達スル手段ガ問題トナル、博士ガ(第一)正貨ヲ蓄積スレバ兌換券ノ増加ヲ誘致シ、輸出増進輸入減退ヲ期シ得ナイガ、(第二)正貨ヲ處分シ外債ヲ償還スレバ以テ外債ノ負擔ヲ輕減シ租税ノ負擔ヲ輕クシ輸出増進輸入減退ヲ期シ得ルト論セラルルニ至テハ余ハ俄ニ之ヲ首肯スルコト出來ヌ、

第一ノ點ニ就テハ余ハ次號ノ論文ニ於テ詳細ニ研究スル積リデアルカラ、茲ニ述ベナイ、今第二ノ點ニ就テ茲ニ少シク疑ヲ述ベテ見タイ、

成程外債ヲ償還スレバ外國ニ支拂フ利子ノ減スルハ明デアル、本年ノ外債償還豫算ニ就テ見ルニ、五分利付佛貨國庫債券四千萬圓、四分半利附英貨公債五千萬圓合セテ九千萬圓ヲ償還セントシテ居ル、故ニ利拂額ノ減スルハ、概略四百二十五萬圓ニ過ギナイ、來年モ同ジ政策ヲ踏襲スルトシテモ利拂ヲ節減スル程度ハ僅カノモノダ、コレヲ減税ニ宛テルカ他ノ目的ニ用フルカハ別ニ研究ヲ要スルガ、假ニ博士ノ說ニ從ヒ減税ニ宛テルトスルモ、四百餘萬圓デハ何トモ致シ方ナイ、來年同シ政策ヲ取ルトシテモ八百餘萬圓シカナイ、此比較的少キ減税ヲシタトシテ、扨ドレ丈ノ經濟力ヲ高メルカ、殆ト見ルベキモノアルマイ、今假ニソレガ經濟力ヲ高メタトシテモ只經濟力ヲ高メタ丈デハ行カヌ、ソレガ輸出超過トナツテ現ハレネバナラヌ、然ラサレバ正貨爭奪戰ニ備

(ヘルコトニナラス、然ルニ減税デ一般ニ經濟力ヲ涵養スレバ輸出モ増サウガ輸入モ増シテ來ヤウ、從テ輸出超過ヲ來スコトハ注文通りニ行クマイ、又租税ヲ輕減スト云フコトニ就テモ、如何ナル租税ヲ輕減スルカガ問題トナル、若シ從來惡税トシテ排斥セラレテ居ル税ヲ輕減スルト云フコトニナレバ通行税、織物消費税、鹽ノ專賣等ニ手ヲ着ケルコトナラウガ、ソレガ果シテ輸入ヲ減ジ輸出ヲ獎勵スルコトニナルカ知ラン、頗ル疑ハシイ、若シ輸出ヲ獎勵スルト云フ目的デ營業税ヲ減スルトセン乎、商工業者ノ負擔ヲ輕クスルコトニナラウ、ケレドモ外債利子ノ減少ヲ營業税ノ輕減ノミニ用フルハ税制ヲシテ不公平ノモノタラシムルコトナリ税制整理ノ精神ニ反スルコトニナラウ、此ク論シ來レバ外債償還デ節約シタ利子ヲ減税ニ向ケタ所ガ十分ノ輸出超過ヲ保障スルコト出來ヌ、從テ多クノ正貨ヲ得ル見込立タヌ、サウナルト正貨爭奪戰ニ備フルニハ現ニ握テ居ル巨額ノ正貨ヲ手離シセス方ガ確デアル。此クイヘバトテ余ハ輸出ヲ多クシ輸入ヲ少クスル方針ヲ以テ正貨爭奪戰ニ備フル方法トセナイノデハナイ、只博士ノ唱導セラルル外債利拂ノ節減ヲ減税ニ宛テルニヨリテ此方針ヲ貫徹シ得ルトズル御意見ニ疑ヲ插ムノミデアル、輸出ヲ多クシ、輸入ヲ少クスルハ正貨ヲ蓄積シテ置イテモ他ニ方法ガナイデハアルマイ

一 正貨爭奪戰ニ備フル第二策トシテ博士ハ次ノ如ク論セラレテ居ル、

若シ數年ナラズシテ各國ノ經濟上ノ創痍恢復シテ我國ガ外國市場ニ於テ外債ヲ借換スルニ差支ナシトスレバ或ハ今日在外正貨ノ増加セルヲ機トシテ倉庫外債ヲ償還スルニ及ハサルベシト雖モ、小川博士ノ說ノ如ク戰後正貨爭奪戰ニ於テハ各國共ニ融通スルヲ避ケ既ニ融通シタルモノハ之ヲ回收スルヲ努ムベシトスレバ我國ハ今日在外正貨ノ増加セルヲ機會トシテ之ヲ償還スル

ヲ得策トスル論ヲ生ズベキ也 *

コレハ余ノ論ノ一節ヲ取リ巧ニ反對ノ結論ヲ導キ出サレタノデアルガ余ハ既ニ前論文ニ之ニ對スル答辯トモ見ルベキモノヲ書イテ置イタ、

我國ハ戰後暫クノ間ハ少グトモ、英佛獨等ノ先進國ニ於テ、起債ヲ爲スコト出來ヌ、借換ハ新ニ正貨ヲ取テ來ルコトニナラヌカラ、絕對ニ出來ナイトハ云ヘヌケレドモ、短期ノ借金ニ至リテハ、借換ノ相談モ六ヶ敷クナリ、資金ノ返却ヲ爲サ子バナラヌコトトナルカモ知レヌ、此ク云ヘバトテ、余ハ四分半利付英貨公債が大正十四年ノ滿期ニ至リ滿期トナリテ少シモ借換ガ出來ナイコトヲ云フノデハナイ、大正十四年ト云ヘバ尙十年モアル、其間ニハ戰爭ノ影響モ薄ライデ來ヤシ、紙幣經濟モ終チ告ケナイトモ限ラヌ、問題ハ十年後ニアラズシテ、戰後數年ニアルノデアル、戰後數年ニ於テハ、正貨爭奪戰ガ、最モ甚シク行ハレルデアラウ、其時ガ、我國ニトリテモ大ニ警戒スベキ時デアアル

正貨爭奪戰ニ備ヘヤウトスレバ、正貨ヲ蓄積シテ置カ子バナラヌ、今日ニ於テ、正貨ヲ手離シ、戰後ノ正貨爭奪戰ニ遇テ、正貨ヲ減ジ而モ借金ニヨリテ、正貨ヲ得ルコト出來ナクナルト、我國兌換制ハ忽チニ危クナルト謂ハ子バナラヌ、ソコデ、我國ハ今日カラシテ戰後ニ備ヘ子バナラヌ、從テ今日獲タル正貨ヲ離サズ、之ヲ貯ヘ置カ子バナラヌ、*、

今驛テ河津博士ノ說ヲ見ルニ、之ヲ意シ詰メルト大正十四年頃ハ各國經濟上ノ創痍恢復セズ我外債ヲ借換フルコト出來ヌカラ今日ニ償還セヨト云フコトトナル、余ハ戰後正貨爭奪戰ヲ豫想セルモ十年後ニ於テ借換ノ不能ナルコトヲ斷言スル勇氣ナイ、ソコハ、河津博士ト見込ヲ異ニスル所デアアル、併シ假ニ河津博士ノ見込ヲ是ナリトシテモ、ソレハ現ニ負ヘル公債ノ處置ニ就テ考ヘラレタニ過ギヌ、戰後ニ於テ我債務ノ増スコトハナキカ、戰後ニ於テ經濟界ノ變動ハナキカト云フコトニ就テハ一ツモ考ヘラレテ居ナイ、併シソレハ考ヘナイデヨロシイカ、

余ハ物價ト輸出入トノ關係ヲ論スルノ條ニ於テ「我國ノ物價ヨリモ外國ノ物價ノ方ガ高クナリテ居ルトスルト我國ノ物價丈ヲ見テ輸入ガ刺激セラレルト云フコトモ云ヘナカラウシ、又我國ノ輸出ガ大ニ減退ストモ云ヘナカラウ」ト論シタガ博士ハ直ニ之ヲ捉ヘ、果シテ然ラハ正貨準備ヲ増加スルノ必要ハ大ニ減スベシト詰難セラレテ居ル、併シ、余ノ此論ハ「正貨ガ増セバ兌換券ノ増發トナリ物價騰貴トナリ、輸出ノ減退トナリ輸入ノ増進トナル」ト云フ説ヲ駁シ常ニサウハ行カスト云フコトヲ明ニシタモノニ過ギヌ、戰後長キニ亘リテ輸出ハ常ニ輸入ノ上ニアリト斷シタノデハナイ。且ツ夫レ輸出入ハ物價ノ高低丈デハ定マルモノデナイ、我國ニ產セザル原料品又ハ機械等ノ如キハ價ノ如何ニ拘ラズ輸入セネバナラス、殊ニ戰後ニ於テ事業熱ガ盛トナリタ時ニ於テサウデアル、サウスルト益々以テ戰後長ク輸出超過ノミヲ繼續スルモノト斷言出來マイ、吾人ハ戰後長ク輸出超過ノ續クコトヲ希望スレトモ輸入超過ノアルコトヲモ豫想シテ置カチバナラス、次ニ余輩ハ又戰後恐慌ガ起レハセヌカヲモ考ヘテ置カネバナラス、余ハ紙幣ガ今日ノ歐洲交戰國ニ横溢シテ居ル狀態ニ顧ミ、戰後暫クノ間ハ是等諸國ニ空氣ガツキ經濟界ガ活氣ヲ帶ブルニ至ルデアラウト信ズルガ、サウカウシテ居ル内ニ恐慌ノ狂風ガ地ヲ捲テ來レハスマイカト考ヘテ居ル、之レハ議論ガ横道ニ入ルカラ茲ニ述ベヌガ（本誌一卷大典紀念號拙稿戰後ノ金融參照）兎ニ角戰後ノ經濟界ハ此ノ如キ波瀾アルコトヲ豫想シテ置ク方ガ中ラズト雖トモ遠カラヌモノデハナイカト思フ、

既ニ此ノ如ク戰後ニハ何時輸入超過ガアルカモ知レヌ、恐慌ガ起ルカモ知レヌトスルト之ニ備

* 本誌第二卷第三號十四頁十五頁

** 國家學會雜誌本年四月號百五頁

フル所ナクテハナラス、若シ正貨ヲ手ニ握テ居レバ悠々ト之ニ處シテ行クコトガ出來ヤウガ、今日正貨ヲ處分シテ多クノ餘裕ヲ持テ居ナケレバ、ザウ行クマイ、是レ余ガ正貨ノ増加ヲ機トシテ一方ニハ中央銀行ノ正貨準備ヲ強クシ、他方ニハ恐慌準備ヲ作リテ置クベシト論シタ所以デアル、博士ハ之ニ對シテ何等批評ヲ下サレテ居ナイガ博士ハ斯ル場合ニ抑々如何ナル策ヲ探ラレヤウトスルノデアアルカ、

三

以上余ハ戰後ニ備フル必要上正貨ノ蓄積セラレネバナラスコトヲ説イタガ、余ガ正貨ヲ蓄積セントスルノ趣旨ハ未ダコレデ盡キヌ、余ハ尙一步ヲ進メ將來ノ戰爭ヲモ考ヘズニハ居ラレヌ、即チ正貨ガ増セバ増ス程戰後ニ備フルコトヲ得ルノミナラズ將來ノ戰爭ニ備フルコトガ出來ルカラ、余ハ中央銀行ノ正貨準備ニ餘レバ戰爭準備金ヲ作ルモ一策ナリト考ヘ、前ノ論文ニモ之ニ論及シテ次ノ如ク云ツタ、

余ハ戰爭準備金ヲ以テ、軍略上、財政上ニ利益アルモノトスル許リデナク、信用制度ノ維持ニ大ニ力アルモノト信スル蓋シ戰時ニハ信用ハ動モスレバ大ニ動搖セントスルモノデアル、此時ニ當リ、巨額ノ準備金ガ現ハレ出デテ中央銀行ノ金庫ヲ堅メルト、信用ノ動搖ヲ靜メルコトガ出來ル、其利益ハ、殆ド金錢ヲ以テ評價スルコト出來ヌ、素ヨリ平時ニ於テ夫ヲ利子ノ比デハナイ、

之ニ對シテ博士ノ高評ヲ忝フスルコトガ出來ナカツタ、併シ博士ガ余ノ説ヲ以テ多々益々正貨ヲ蓄積スルモノトシテ斥ケラルルカラニハ、將來ノ戰爭ノ爲ニ正貨ヲ蓄積シ置ク要ナキコトヲ説

カレネバナラヌカト思フ、

將來ノ戰爭ニ備フル爲ニ正貨蓄積ノ如何ニ必要デアルカラ知ルニハ正貨ガ今日ノ歐洲戰爭デ如何ナル作用ヲ爲シテ居ルカラ觀ルガ捷徑デアル、成程英國ヲ除ク外ノ國デハ兌換制度ノ維持ガ出來ナクテ、不換紙幣ガ發行セラレルコトニナツテ居ルガ、ソレデモ各國ニ比較的多クノ正貨ヲ蓄ヘテ居ルカラ外國カラ軍需品ヲ得ルニモ都合ガヨク、又内國ニ於テモ信用ノ根本的破壊ヲナサナイデ濟ンテ居ル、獨逸ノ如キハ開戰當時支拂猶豫令(Moratorium)ヲ發セズシテ難局ヲ切り抜ケテ行ツタ、素ヨリ種々ノ政策ガ皆宜ヲ得タルノニ因ツテ居ラウガ、抑々又、戰爭準備金ガアリテ、之ヲ一時ニ帝國銀行ノ正貨準備ニ加ヘテ、信用ノ動搖ヲ防ギタノニモ因ツテ居ルコト大デアルト謂ハネバナラヌ、我國ノ學者ハ從來戰爭準備金制ニ對シテハ冷笑ノ態度ヲ採ツテ居ツタガ獨逸ノ學者ハ平素頻ニ之ヲ辯護シテ必要ノ政策デアルト云ツテ居ツタ佛國ノ學者ノ如キモ却テ獨逸ノ制度ヲ羨ムモノガアツタ、今日ノ實績カラ見ルト、獨逸學者ノ觀ル所ガ遙ニ我國學者ノ考ヘテ居ツタコリモ、ヨカツタコトガ判ツタ。

戰爭準備金ノ制度ハ獨逸ニ存シテ他ノ國ニハナカツタガ併シ他ノ國ニテモ同ジ結果ニ到着スルモノガアツタ、ソレハ、外デモナイ、中央銀行ガ正貨ヲ集メルノ政策デアル、佛露等ハ數十年カカツテ正貨ヲ集メテ來タ、是レ有事ノ日ニ備ヘンガ爲メデアツタ、是レガ今日ノ戰爭ニ大ニ役ニ立ツタ、思フニ戰後兌換ノ恢復ヲ爲スニモ亦大ニ役立つデアラウト信ズル、

此ノ如ク見テ來ルト歐人ノ正貨策ハ實ニ遠大デアル、歐人ノ用意ハ實ニ周到デアル、我等ハ目

前ニ此ノ如キ正貨ノ作用ヲ見テ居ル、我等ハ何故之ヨリ教訓ヲトラヌノデアルカ、我國ニシテ若シ歐洲ト覇ヲ爭フノ志アラバ他日戰爭ノアル場合ヲモ見テ、財政上ノ準備ヲモ考ヘテ置カネバナラヌ、嘗テ川上將軍ハ日清戰爭ヲ終ルト共ニ日露戰爭ノ作戰計畫ニ移ソタト云フ、若シ川上將軍ヲシテ財政家トシテ今日ニ再生セシメバ必ズヤ今日歐洲戰爭ニ參加シテ居ル間ニ更ニ來ルベキ他日ノ戰爭ニ對シ財政上ノ準備ヲナスデアラウ、財政經濟ノ方面ニ川上將軍ノナキハ我國ノ爲ニ惜シムベキコトト謂ハネバナラヌ、

以上論スル所ニヨリテ之ヲ觀レバ、平時ニ於テ信用制度ヲ維持スル上ニモ、歐洲戰後ノ正貨爭奪戰ニ對抗スル上ニモ、又更ニ來ルベキ戰爭ニ備フル爲ニモ正貨ハ蓄積セネバナラヌ、

四

正貨ノ蓄積セラレネバナラヌ理由ハ、此ノ如ク實ニ信用制度ノ維持ニ關係シ國民經濟ノ存立發達ニ關係シ、國家ノ興亡ニ關係スルモノデアル、決シテ小サイ損得ノ問題デナイ然ルニ論者動モスレバ正貨ガ多クナレバ利子ガ得ラレナイデ損トナルト云フテ、正貨ノ蓄積ニ反對スルモノガアル斯カル論ヲ假ニ利子損失論ト名ケテ置ク。今少シク此論ノ當否ヲ調べテ見ヤウ、

戰爭準備金ノ場合ニ於テハ何等ノ利子ヲ得ルコト出來ヌガ既ニ前ニモ述ヘタ通り之ガ爲ニ動員費ヲ支辨シ得テ電光石火ノ軍事の行動ヲトルコト出來ル許リデナク開戰ノ爲ニ動搖スベキ信用制度ヲ維持スルコトガ出來、利子ヲ得ナイヨリモ更ニ優リタ利益ガアルカラ利子ヲ失フノ故デ之ヲ排スルコト出來ヌ、

正貨準備トナツテ居ルモノニ就テ考フルニ、兌換券發行額ニ該當スル正貨準備ハ遊デ居ルモノト見ルコト出來ヌ、兌換券ハ正貨ノ身代リニ出デテ居ルノデアル、矢張り其正貨ガ利殖セラレテ居ルモノト見テヨロシイ、故ニ正貨準備額ガ兌換券ノ總發行額ヲ超エザル限リハ正貨ノ多キ爲メニ損ヲシテ居ルト云フ論ハ出テ來ナイ

次ニ在外正貨ニ就テハ之ヲ如何ニ利用シテ居ルカニ依テ損トモナリ利益トモナル、河津博士ハ非常ノ損失デアルト論斷セラレテ居ル、其理由ハ

正貨トシテ英蘭銀行ニ預托スル場合ニハ利子ヲ生セズ、之ヲ大藏省證券等ニ運用スルモ其利子ハ極テ少キガ故ニ一面ニ多クノ外債ヲ擔シ之ニ對シテ四五分ノ利子ヲ支拂フトセバ我國ハ巨額ノ正貨ヲ維持スルガ爲メニ巨額ノ損失ヲ忍ハザルベカラサルナリ、是レ決シテ得策ニアラザルナリ

ト云ハレテ居ル、併シ在外正貨ノ中ニハ日本銀行ノ正貨準備ニ組ミ入レラレタモノガアル、ソレガ英蘭銀行ニ預托セラレテ居ルトスレバ、日本銀行ノ庫ニアルト同ジコトデ前述ノ理ニヨリ全然利子ヲ失ヘルモノト云ヘヌ、準備外ノ正貨ハ日本銀行ハ英國ノ大藏省證券ヲ買ツタリ又ハ英國ノ銀行等ニ融通シテ居ルノデナイカト思ハレルガ、戰時ノ大藏省證券ハ利子ガ高イ又近頃ノ英國ノ金利ハ我國ヨリモ高イノデアルカラ正貨ノ運用ハ河津博士ノ云フガ如ク損デハナイ却テ利益トナツテ居ラウ

日本銀行ガ在外正貨ヲ斯ノ如ク運用スルガヨイカ惡イカ又在外正貨ヲ倫敦ニ置クノガヨイカ惡イカハ別問題トシ、在外正貨ヲ維持スルガ爲メニ我國ガ巨額ノ損失ヲナシツツアリト云フハ事實

ニ相違シテハ居ナイカ、若シ、巨額ノ損失ドコロカ、利益トナツテ居ツタラ河津博士ノ正貨蓄積反對論ハ一半ノ理由ヲ失フコトニナレハスマイカト思フ、

要之利子損失論ヲ以テ正貨蓄積ニ反對セラルルハ肯綮ニ中テ居ナイヤウデアル。

五

最後ニ正貨蓄積論ノ爲ニ辯セテバナラヌノハ正貨ノ蓄積ハ、蓄積スルコトヲ目的トシテ蓄積スルノデナク、蓄積ハ萬一ニ備フル爲メデ、其萬一ノ場合ガ來レバ之ヲ用フルト云フコトデアル、

正貨ガ存在スレバ其存在スルト云フコト丈デ信用ヲ維持シ得ルコトアルガ、併シ又正貨ガ形ヲアラハシテ初テ信用ヲ維持シ又ハ難局ヲ切抜ゲルコトヲ得ル場合ガ多イ、故ニ斯ノ如キ場合ハ正貨ハ利用セラレネバナラヌ、正貨蓄積論ハ正貨ヲ死藏スルヲ目的トセナイ之ヲ利用スルコトアルヲ豫想シテ居ル、イザト云フ場合ニハ劍ヲ抜ク、只濫リニ劍ヲ抜カナイ丈デアル、

然ラバ如何ナル場合ニ正貨ヲ用フルカト云フニ其場合ハ凡ソ三アル、國際支拂ヲ決濟スルニ必要ナル場合ハ其一デ、恐慌ノ起ル場合ハ其二デ、戰爭其他非常ノ場合ハ其三デアル

恐慌ヤ戰爭ガ起ルト兌換ノ請求モ起ラウシ、兌換ヲ停止シテモ尙正貨ヲ用ヒネバナラヌコトガアル、ソハ前ニ述ベタレバ茲ニ再ビ贅セナイ、

國際支拂ヲ決濟スルニ必要ナル場合ハ、普通ノ時ニモ起ル、或ハ兌換ノ請求トナリ、或ハ正貨ノ輸送トナリ、或ハ在外正貨ノ引渡トナル、今日ノ様ニ軍需品ガ出テ行キ東洋南洋ノ方面ニ先進國製品ニ代ハル物ガ多ク出テ行ク間ハ大體輸出超過ガ續クト見テ差支ナク從テ外債ノ利拂等ヲ差引

イテモ正貨デ支拂スルノ要ハナイ様ニ思ヘル、併シ、何時迄モサウデアルト安心シテ居ル譯ニ行カヌ、蓋シ戰後ニ於テ何時迄モ金融ガ太緩漫デアレバ、私人ハ銀行ニ預金スルモ利子ガ少イシ、銀行ハ遊金ヲ抱テ損スルト云フコトニナルカラ、其私人ヤ、銀行ヤハ、外國ノ余利ノ高イノニ眼ヲ着ケ、外國ノ銀行ニ預金シ外國ノ有價證券ニ投資スルモノガ出テ來ルカモ知レナイ、又支那其他ニ新シク事業ヲ起スモノモ出テ來ルデアラウ、現ニ今日デモサウイフ傾向ハ多少、現ハレテ居ル、戰後ソノ勢ガ大トナツテ來ルト、知ラヌ間ニ對外支拂ガ非常ニ巨額ニナツテ來テ國際支拂ニ正貨ヲ要スル様ニナツテ來ヌトモ限ラヌ。コレハ外國放資ノコトデアルガ、次ニ內國放資ニ就テ考フルニ、目下ハ金融緩漫デアルケレドモ、事業擴張ノ徵候勃々現ハレテ來出シタ、此勢ガ醸成セラレルト戰後ニハ遅クトモ、事業勃興ノ時代カ來ヤウ、サウナルト、我國ニ供給ノ少キ鐵材ヤ機械類等ガ無暗ニ輸入セラルルヤウナコトモ起テ來、不知不識ノ間ニ國際支拂關係ガ亂レ、我國ハ正貨ヲ以テ決濟ヲセネバナラヌコトニナツテ來ヤウ、其時ニナレバ正貨ハ用ヒズニハ居ラレマイ、加之事業勃興シ初メルト國際支拂ヲ待タズ金融ノ逼迫トナリ日本銀行ノ助ヲ借ラテバナラヌコトニナラウ、其時ニ日本銀行ガ正貨ヲ十分ニ持テ居ルナラバ、之ヲ準備トシテ兌換券ヲ發行シ其需ニ應スルコトガ出來、正貨ノ効用ガ、ソコニ現ハレル、若シ其際ニ正貨ガナカツタナラ日本銀行ハ財界ノ要求ニ應スルコトガ出來ナクナラウ、

依是觀之蓄積セラレタ正貨ハ内外放資ノ盛トナル時代ニハ利用セラレルコトトナル、余ノ論ハ其時ニモ備ヘントスルノデアル、從テ其時ニナルト余ノ論ハ正貨資金化論ト同ジ結果ニ達スル、併

シ今日ヨリ見ルト大ニ違フ今日ニ於テハ余ハ正貨ヲ蓄積セントスルノデアルガ、正貨資金化論者ハ今日ニ於テ既ニ之ヲ用ヒントシテ居ルノデアル、併シ經濟界ガ眠リテ居リテ資金ヲ需要セナイノニ、ドウシテ正貨ヲ資金化スルコトガ出來ルカ、日本銀行ノ利子ハ市場利率ヨリ遙ニ高イ、市場利率ヲ以テシテモ借ルモノガ少クテ困マツテ居ルノニ日本銀行ハドウシテ正貨ヲ資金化スルガ爲ニ貸付ヲナスコトガ出來ルカ、解シ難キ論ト云ハ予バナラス

河津博士ノ論ハ正貨資金化論デハナイ、此論駁ハ博士ニ向ケルベキモノデナイ、併シ博士ハ今正貨ヲ處分セヨト論セラルル以上ハ遅クトモ戰後ニアラハ來ラントスル事業勃興ニ對シテハ何等正貨ノ準備ヲ要セナイトセラルルノデアルカ、若シ要セナイトスレバ我國ノ工業ハ更ニ發達セシムル必要ナイトセラレルノデアルカ其邊ノ御意見ヲ知ルコト出來ナイノハ遺憾デアル。

之ヲ要スルニ余輩ノ正貨蓄積論ハ目前ノ小利ヲ超越シ、國家、并ニ國民經濟ノ將來ノ安固ヲ期スルト云フ觀點ニ立テ立論シタモノデアル、若シ目前ノ小利ヲ重シトシ將來ノコトヲ顧ミル暇ナシトスルモノアラバ余ハ到底論者ト議論ノ一致點ヲ見出スコト出來ナイト思フ。

(附記) 此篇ハ河津博士ノ「再ヒ在外正貨處分問題ニ就テ」ノ論文申主トシテ第二段ノ駁論ニ關係シテ居ル、其御答シツツ議論ヲシタノデアル、同博士ノ第三段ノ駁論并ニ三宅氏ノ攻擊ニ對シテハ余ハ次號ノ論文ニ於テ答ヘル積デアル。